

文化財
NEWS速報

ある国文学者が見た松尾芭蕉の句碑 ～奥の細道首途の碑古写真～



写真2 千住・天王森行く春の句拓影
『芭蕉名碑』と『東京文学百景』
(©有峰書店新社)

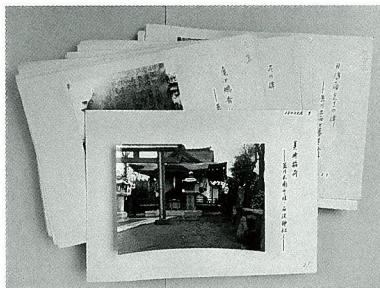


写真3 寄贈された区内の文学遺跡の写真



写真1 「奥の細道 首途の碑」(志村士郎氏撮影)

荒川ふるさと 文化館だより

荒川区教育委員会
荒川ふるさと文化館
荒川区南千住6-63-1
TEL 03(3807)9234
登録(26)0058号

高度経済成長期の句碑 写真1はご存知、素盞雄神社の松尾芭蕉の碑（荒川区指定有形文化財）です。「千寿といふところにて舟をあがれば」に始まる「おくのほそ道」の文と「行く春や鳥啼き魚の日は汨」の句が刻まれ、奥の細道矢立初めの句碑とも呼ばれています。

撮影されたのは、昭和40年代中頃。写された碑の表面を見ると、昭和59年（一九八四）に補修された現在の句碑に比べ、欠損は少ないものの碑表面の剥離は相当に進みつたり、芭蕉の句碑の保存の変遷を知る上で、貴重な写真資料と言えます。

実はこの写真、千住あらかわ奥の細道サミット開催記念「奥の細道展（仮）」に向けての調査を進めている中で、当館にかかるてきた一本の電話に依つてもたらされたものです。「国文学の研究をしていた父が撮影した荒川区内の文学碑の写真が手元にある。必要なら寄贈したい」という申し出でした。念のため確認すると、素盞雄神社の芭蕉句碑もあるとのことです。

東京文学遺跡を記録する

志村士郎氏（元昭和女子大短期大学教授）でした。そもそも何故、句碑などの文学碑を見に行き、撮影したのでしょうか。志村氏は、昭和46年度東京都教育委員会の教育研究奨励金を受け、都内の「文学遺跡」（句碑・記念碑及び境内地等）の調査・研究に従事していました。この写真は、その貫として撮影した膨大な写真の中の一枚で、金石文研究者の本山桂川の著作『芭蕉名碑』（弥生書房 昭和36年）に拓影（拓本）が掲載されていたことがきっかけで調査に出向いたそうです（写真2）。

志村氏が調査した文学遺跡は、都内全域に及びましたが、研究報告は23区の100景に絞られ、昭和47年6月に脱稿しました。23区に限った理由は、高度経済成長期、公害により疲弊している東京の街中にも、昔ながらの風情が残り、文学のテーマとなつた場所に向えれば、「なつかしい表情に触れる」ことができる。昨今の史跡めぐりでは、陳腐になつてしまつた場所や記念碑であつても、文学に照準を合わせて捉えなおし、その景観を文学遺跡として記録する必要がある、という信念にありました。そしてその成果は、同年9月に『東京文学百景』（有峰書店新社）として出版されました（写真2）。この写真は、「奥の細道首途の碑」と題された図版のオリジナルプリントだったのです。

区内的文学遺跡

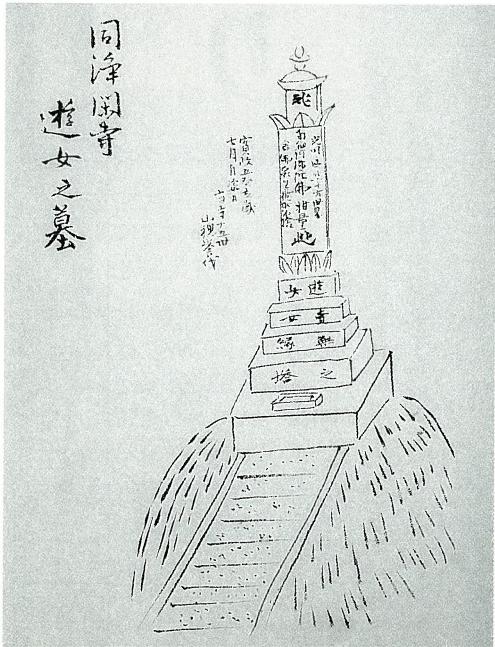
志村氏がカメラに収めた荒川区内の文学遺跡には、南千住の千住大橋・小塚原刑場跡・石浜神社・円通寺・淨閑寺・西日暮里の諏訪神社・養福寺・青雲寺等があり、またそれ以外にも、諏訪台・汐入の渡しなどの風景写真もあります。今回、それらの写真も、ご寄贈いただきました（写真3）。

来春の企画展（平成27年2月21日（土）～3月22日（祝）では、国文学者だけではなく、百年以上にわたり、多くの人がびとが注目してきた松尾芭蕉の句碑、そして奥の細道の世界について、更に掘り下げてご紹介します。ご期待ください。《野尻かおる》

あらかわ
タイムの流れ(25)



写真1 新吉原総靈塔（淨閑寺境内）

写真2 「江戸古墳見聞集」1（別書名：「埋木花」）
(東京都立中央図書館蔵東京誌料)

も三回形を変えているらしい。

新吉原総靈塔のむかし

遊女の亡骸を埋葬してきた淨閑寺。「投げ込み寺」「無縁寺」の俗称でも知られる。なかでも境内の新吉原総靈塔は、象徴的な石造物とみなされており、区内でも著名な文化財である（写真1）。しかし、実は次のこ

としかわかつてない。そもそも「総靈」とは何を指

しているのか自明ではない。

①寛政5年（一七九三）以来の供養塚を改修したも

の（荒川区史跡散歩）。

②以前の塚は、安政2年（一八五五）の安政大地震で横死した遊女たちを葬つたものであった（同前）。

③昭和4年（一九二九）に、墓地全域を改葬し、その際、笠と台座部分を除いて改修された（『あらかわの史蹟』）。

今となつてはこれらの記述の根拠は不明である。であるが、これを信じれば、新吉原総靈塔は、形を変えつつも同じものとして認識されてきており、少なくとも

墳見聞集に記された図である。別名「埋木花」という（以下、こちらの資料名で記す）。同書は、平一貞が編纂した書物で、文政9年（一八二六）の自序をもつ。江戸及びその周辺の塚や墓・碑などが収められており、今では失われた石造物も多数図入りで紹介されているので、貴重である。

「埋木花」所収の「遊女之墓」もその一つである（写真2）。この図によると、正面に「南無阿弥陀仏」の六字名号、「推量」とあり、両脇に「光明遍照十方世界」「念佛衆生攝取不捨」と觀無量寿經の偈も刻まれている。また、側面に刻まれていたという銘文から、寛政5年7月15日の中元に、淨閑寺一五世巍尊上人が建てたこともわかる。先述①②では「塚」とされているように、盛り土の上に建てられており、さらに写真1と2を比較すると、笠と台座は異なるので、どうやら③の段階で塚部分も、この石造物も失われたらしい。

さらに特徴的なのは五段の基壇で、「遊女」「売女」「無縁」「之塔」と刻まれていた。

○ ○

つまり、さしあたつてここに供養されているのは、「遊女」「売女」「無縁」ということになる。江戸では、遊女を抱えることは、新吉原だけに与えられた特権だった。しかし実際には、江戸中に非公認の遊女があり、彼女らは「隠女」と呼ばれた。「埋木花」の説明によると、町奉行所は、新吉原に「隠女」を取り締ませ、摘発された「隠女」を新吉原に抱えさせた。これを新吉原では「売女」と呼んだ、とある。「売女」は当初、淨閑寺にのみ葬られていたが、やがて遊女同様、縁のある他の寺へも葬られるようになつたという。ここでいう「遊女」「売女」は、こうした人びとであろう。これにその他の「無縁」が加わる訳である。今日の新吉原総靈塔が、写真2の段階のものから、継続して存在しているとされているならば、名称となつている「総靈」とは、上記の人びとの靈を指していると思われるのである。

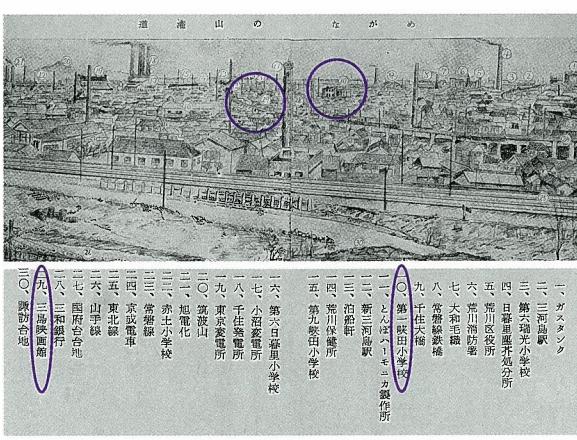
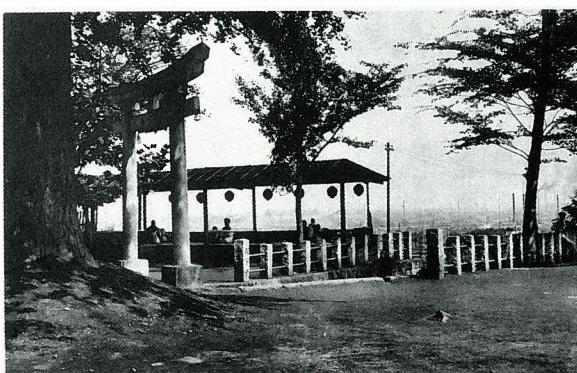
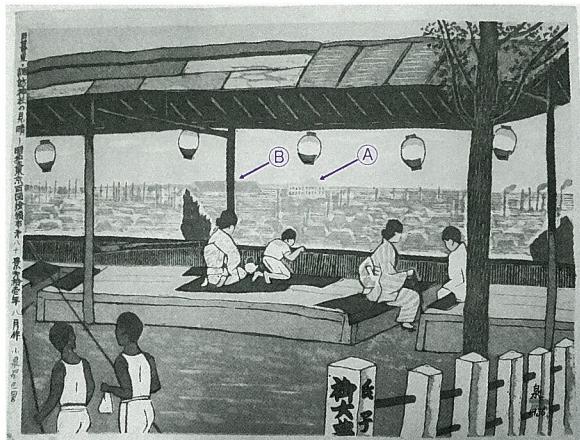
○ ○ ○

ちなみに、「埋木花」の筆者が、淨閑寺の僧に聞いたところによると、淨閑寺へ遊女を葬るようになつたのは、凡そ30年来のことだという。写真2の塔が建つた寛政5年からであると思われる。しかしながら、同寺に残る「淨閑寺過去帳」（荒川区指定有形文化財）は、寛保3年（一七四三）から現存しており、そこには遊女・「売女」、その他、無縁の者たちの戒名も見える。もしかすると、さらにその前身となる「総靈塔」があつたのかもしれない。

（亀川泰昭）

【参考文献】 塚田孝「身分制社会と市民社会」（柏書房、一九九二年）、同「近世身分制と周縁社会」（東京大学出版会、一九九七年）。

うれしいお買いもの⑦



諏訪台の見晴らし台 版画「日暮里・諏訪神社の見晴し」(写真1)は、大正～昭和初年頃に活躍した版画家の小泉癸巳男氏が昭和3～12年(一九二八～三七)に手がけた「昭和大東京百図絵」というシリーズの一枚です。区内では他に「千住タンク街」(旧東京瓦斯株式会社千住製造所)も描かれています。第80作目にあたる本作は昭和11年に制作され、西日暮里三丁目にある諏方神社境内の見晴らし台とそこから見える東方の眺望が描かれています。子どもがのぞきこむ台地の真下には鉄道が通つており、走る汽車をながめていたのかもしれません。

昭和の見晴らし それでは「日暮里・諏訪神社の見晴し」に描かれた昭和の見晴らしを見てみましょう。凡そ手前が日暮里、右奥が南千住、中央奥が三河島、左奥が尾久の辺りになります。全体としては立ち並ぶたくさんの工場の煙突群と家屋の屋根が描かれ、関東大震災後にあらかわの工業化・

川広重の錦絵「名所江戸百景 日暮里諏訪の台」にも描かれ、三河島・尾久に広がる田園の先に荒川(現隅田川)や筑波山・日光山などが見える眺望が有名でした。大正12年(一九二三)の関東大震災を経て昭和初年に至る頃には、開発により眼前の眺望が変わりましたが、昭和7年(一九三二)に報知新聞社の企画で新東京八名勝に選ばれました。当時の見晴らし台は選定記念の絵葉書(写真2)にもなっています。境内の地蔵坂に向かう玉垣のすぐ脇に、提灯が掛かった東屋があり、縁台に腰掛ける人びとを捉えた構図もこの版画とほぼ同じです。

道灌山のながめ それでは、「日暮里・諏訪神社の見晴し」に描かれた昭和の見晴らしを見てみましょう。凡そ手前が日暮里、右奥が南千住、中央奥が三河島、左奥が尾久の辺りになります。全体としては立ち並ぶたくさんの工場の煙突群と家屋の屋根が描かれ、関東大震災後にあらかわの工業化・

筋造りの建築は印象的だったのかもしれません。

一方、建物⑧は屋根の形から

「二九」の三島映画館だと推定されます。開館年は不詳ですが、古くは大正14年(一九二五)の「東京府下三河島町日暮里町全図」に確認でき、310人が収容できる規模の映画館だったようです。

同じ諏訪台からの眺望ですが、昭和初年頃にこの地を訪れた人びとは、江戸時代の頃とは打って変わって目新しい建物が建つ近代的な街並に、目を見張ったのかもしれません。

（澤田善明）

宅地化が進んだことが見て取れます。このような煙突群や家屋の屋根が霞がかつた灰色で表現されるなか、中央奥に窓がたくさんある建物⑨と横長の屋根が特徴的な建物⑩が目立つよう色分けして描かれています。眺望を描く上で目印になる建物だつたと思われます。

この図と版画とを見比べていくと、建物⑨は明治16年(一八八三)に創立された同校は、昭和3年に鉄筋3階建ての校舎に改築されました。まだ木造の屋根が多いなか、そびえ立つ近代的な鉄

あらかわモノ知りシリーズ

第一回

文化鍋、発祥の地あらかわ



写真1 文化鍋 (当館蔵)



写真2 蓋のツマミ部分
(天使がKの字を抱えたマーク)

「文化」が付く鍋 写真は、区民の方から寄贈され、当館に収蔵している資料で、「文化鍋」と呼ばれる鍋です。文化鍋と聞いてピンとくる人は、昔、家にあった方ではないでしょうか。家庭で広く使われるようになつたのは、昭和30年代ですが、昭和20～30年代（一九四五～一九六四）、戦後から高度経済成長期にかけて頭に「文化」と付けられたモノが作られます。ここで言う「文化」とは便利、あるいは最先端を意味するものだったようです。今より住まいを取り巻く環境の変化は大きく、例えば、ご飯を炊くには専ら薪を燃料にかまどで羽釜を使つていましたが、一般家庭にガスが普及すると、ガスコンロを使うようになりました。こうしたエネルギーの変化に応じるようにして文化鍋も登場しています。では、文化鍋とはどのような鍋なのが見ていいましょう。

天使印の鍋 鍋本体は、へり部分が張り出していて、かつ、内側を向いた作りで、煮汁の吹きこぼれがないような構造をしています。蓋は山型で、蒸気を内

【文化】が付く鍋 写真は、区民の方から寄贈され、当館に収蔵している資料で、「文化鍋」と呼ばれる鍋です。文化鍋と聞いてピンとくる人は、昔、家にあった方ではないでしょうか。家庭で広く使われるようになつたのは、昭和30年代ですが、昭和20～30年代（一九四五～一九六四）、戦後から高度経済成長期にかけて頭に「文化」と付けられたモノが作られます。ここで言う「文化」とは便利、あるいは最先端を意味するものだったようです。今より住まいを取り巻く環境の変化は大きく、例えば、ご飯を炊くには専ら薪を燃料にかまどで羽釜を使つていましたが、一般家庭にガスが普及すると、ガスコンロを使うようになりました。こうしたエネルギーの変化に応じるようにして文化鍋も登場しています。では、文化鍋とはどのような鍋なのが見ていいましょう。

文化鍋誕生 この会社は、大正6年（一九一七）、東京市荒川区日暮里において設立されたアルミ鋳物メーカーです。当初は、大熊アルミニウム鋳造所としてアルミニウム製の羽釜の生産をしていました。同17年、第二次世界大戦の中、国の政策により企業整備が行われ、関東軽金属器物铸造株式会社が設立。先々代社長大熊三郎が同社の初代社長に就任し、同20年の終戦後、同社を引き継ぎ、同年10月、文化鍋の実用新案特許取得の際、文化軽金属铸造株式会社と改称しました（同社公式ホームページより）。

つまり、この日暮里にあつた会社が「文化鍋」を世に送り出したのです。文化鍋はあらかわが発祥の製品だったのです。

側に閉じ込めます。蓋と本体の間から吹き出る米のうすい膜ができることで密閉され、ふつくらと美味しいご飯が炊けるのです。材質は、軽量のアルミニウム製です。軽量ながら厚手で、熱の伝導率に優れ、ご飯を炊く他、パンを焼いたり、煮物料理に使う人もいました。館蔵の鍋には、蓋のツマミ部分に、天使が「K」の文字を抱えたマークが見えます（写真2）。文化鍋といつてもいくつかの会社が製造しています。このマークを手掛りに調べたところ、作っていたのは、文化軽金属铸造株式会社という鋳物の会社とわかりました。

天使のおもかげ その後、文化軽金属铸造株式会社は鋳物の街で知られる埼玉県川口市に移転します。今でも文化鍋は販売されていますが、同社では、もう、文化鍋を製造していないそうです。しかししながら、会社のマークは現在も変わっています。なぜ天使なのか、詳しくはわからないけれども、社内で話し合つて決まったそうです。なお、現存する当時のカタログには天使鍋と表示していますが、裏面には文化鍋（BUNKA RICE PAN）と記されていました（写真3）。

最後に、ご教示、ご協力いただきました大熊幸彦氏にお礼申し上げます。

『八代和香子』



写真3 文化鍋のカタログ
(昭和30年代)

平成26年度第一回企画展「モノ・道具・暮らし」展 [会期平成26年10月18日(土)～12月7日(日)]で、当館に収集された古い生活道具を展示しています。あらかわ発祥の文化鍋をはじめ、昔の道具を通して、思い出を語りあう機会にぜひご活用下さい。



写真1 蟻燭屋吊看板
(倉嶋義久氏蔵/当館寄託)



常設展示室にて見学にやつてくる小学生に、「これ（写真1）は何屋さんの看板でしよう？」というクイズを出すことがある。正解は（タイトル通り）、蠅燭屋の看板なのだが、正解率は5%というところだろうか。中には中央に大きく書かれた、かすれた文字を読んで、「松坂屋」と答える子どももいる。勿論間違えではないのだが、「松坂屋」とは蠅燭屋の屋号である。この店は千住宿小塙原町の三ツ角（現南千住五丁目44）にあった。

「松坂屋」と書かれた蠅燭の部分が白ければ、もう少し正解率が上がるかもしれない。もつといえども、店舗の前にある状態ならば、クイズにもならないだろう。博物館に展示されているモノは、元の位置から移され、展示室に置かれているから、元々どういう形で使われていたのかは、基本的には分からなくなっていることが多い。

松坂屋の引札 そのため、収集になるべく聞き取りをしておくことが必須の作業である。しかし、旧蔵

（松坂屋）は、中には中央に大きく書かれた、かすれた文字を読んで、「松坂屋」と答える子どももいる。勿論間違えではないのだが、「松坂屋」とは蠅燭屋の屋号である。この店は千住宿小塙原町の三ツ角（現南千住五丁目44）にあった。

「松坂屋」と書かれた蠅燭の部分が白ければ、もう少し正解率が上がるかもしれない。もつといえども、店舗の前にある状態ならば、クイズにもならないだろう。博物館に展示されているモノは、元の位置から移され、展示室に置かれているから、元々どういう形で使われていたのかは、基本的には分からなくなっていることが多い。

松坂屋の引札 そのため、収集になるべく聞き取りをしておくことが必須の作業である。しかし、旧蔵

者が亡くなり、それが適わなくなつた場合、他の史料で補い検証していくこととなる。こうなると、それほど都合のよく関連資料が目の前に現れたりすることはそうないが、幸いにもこの看板については、引札（昔のチラシ）が残っている（写真2）。冒頭の文は「『演』とあるので、店頭で街頭に呼び掛ける口上のようなものだ。以下意訳。

各々様方、益々ご機嫌宜しく遊ばされ恐悦至極に存じます。このたび私は、水油・蠅燭・紙類、その他荒物の商売を始めます。精々、卸の問屋を吟味し、よく働いて安く販売するつもりです。多少に限らず御用向きを申し付けてくださいますよう、偏に願う次第です。

中央には大きな文字で、水油・蠅燭・紙類他と商つてゐる品々を列記しているが、その横に描かれている看板は明らかに蠅燭である。また、最後の2行から、11月某日より開店し、粗品も配られたようである。その年はわからぬが、倉嶋家が所蔵する「五種香 松坂屋藤兵衛」とみえる版木には、安政2年（一八五五）の墨書きがあるので江戸時代であることは明らかだから、それ以前と考えられるだろう。

二つの看板を比較する 引札の中の看板と展示室の看板は、形や文字が若干違う。ただ、二つを対照することにより次のことがわかる。

- ①引札の看板が開店当初のものであるとしたら、常設展示室の看板は、それ以降のものと考えられる。
- ②引札の看板の右にある「生掛け」と常設展示室の看板の「巻掛け」の意味は同じで、温めて練った木蠅（生蠅）を芯に素手で何度も塗つて乾かすという作業を繰り返して作った蠅燭を指す。ついでに「清淨」とは、蠅に混ざり気のないことを言い表している。
- ③ハゼの実から作られる木蠅は、紀伊国（現和歌山

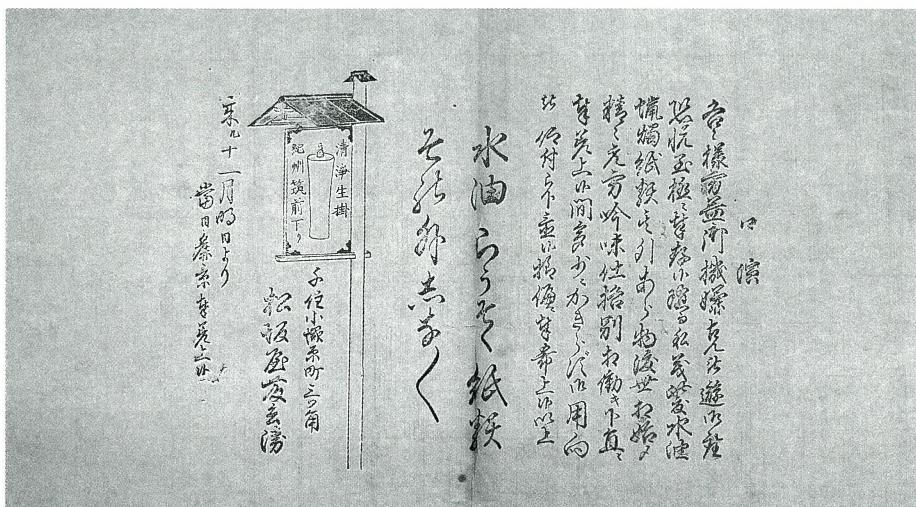


写真2 「墨摺 蟻燭屋引札」(埼玉県立歴史と民俗の博物館蔵)

県) 及び筑前国（現福岡県北西部）産を使用していたらしい。但し、常設展示室の看板には、「筑州生蠅」としか書かれていないので、その後、紀伊国から卸すのを止めたのかもしれない。

- ④常設展示室の看板は、本体しかないが、本来、引札のよう往來に別途柱を建てて、掛けられていた可能性が高い。行き交う人びとの目に留まるようになっていた。

《亀川泰昭》

収蔵庫のアソビン！

「品目」汐入胡録神社の襖御披露告知文

このシリーズは、当館の収蔵庫で保管する荒川区の貴重な資料群の中から逸品を選び、紹介していきます。シリーズ最初の一品目は、今年4月に寄贈されたばかりの史料、汐入胡録神社の襖御披露告知文慶祝立太子記念胡録神社の襖御披露（写真1）とそれにつわるお話をします。

「汐入胡録神社の襖」とは？ 南千住八丁目にある胡録神社所蔵の「地方橋場汐入四季風物図」（写真2）のことを指します。この絵は、千住大橋から石浜神社までの隅田川右岸の風景を描いた襖10枚で構成されており、昭和27年（一九五二）、地元の画家・若原天応の手によって描かされました。かつて胡録神社の周辺は、汐入大根や牡蠣殻から作る胡粉の産地として有名でした。『新修荒川区史』（昭和30年）などによると、汐入産の胡粉は質の良い面胡粉という白色の絵具で、人形や能面などの彩色に用いられていました。その質の良さから、浅草や神田

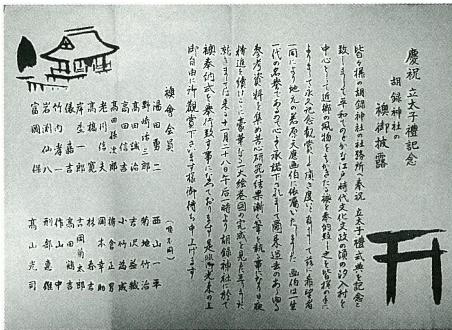


写真1 汐入胡録神社の襖御披露告知文（当館蔵）

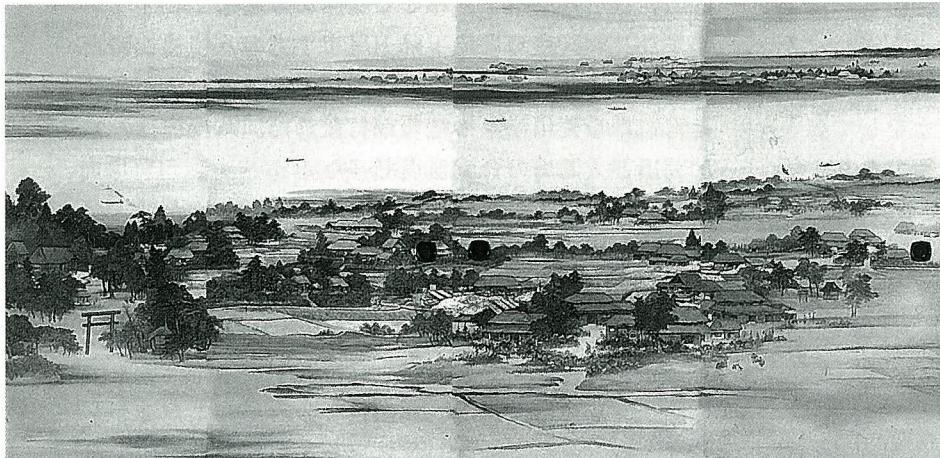


写真2 胡録神社の襖絵 地方橋場汐入四季風物図（部分）
汐入を描いた部分をよく見ると、画面中央の農家の庭に白い山が出来ているのが確認できる。これは、胡粉の材料で汐入の土中から採取した化石化した牡蠣殻である。

など江戸の絵具屋だけでなく、京都からの注文もあつたほどです。
襖絵が描かれたわけ この襖絵が奉納された経緯について、告知文には「立太子式典を記念と致しまして平和でのどかな江戸時代文化文政の頃の汐入村を中心として近郊の風物をえがきたる襖を奉納いたし之を皆様の手によりまして永久記念觀賞して頂き度いと存じまして（中略）希望者一同により地元の若原天応画伯に依嘱いたしました」とあります。

この他、告知文には、同年同月28日の午後1時より、襖絵の奉納式と関係者への披露会を行う旨が記されています。この告知を作成したのは、「襖会会員」となっていますが、会員の名前に注目してみると、いずれも胡録神社の氏子総代や昭和22年に行なわれた同社の祭礼で、祭礼委員会会計係等を務めた人びとの名前が記されています。

さて、今回の品目で周知された、「地方橋場汐入四季風物図」の全体像はどんなものなのか。まだご覧になつたことのない方は、当館の平成13年度企画展図録『川と川—暮らし・想い・姿』にて一度ご覧ください。

※汐入胡録神社の襖御披露告知文を含む、昭和8年（一九三三）～昭和27年（一九五二）までの旧南千住十丁目界隈の史料群「南千住十丁目町会関係資料」をご寄贈いただいた、牛米努氏（税務大学校租税史料館研究調査員）に感謝申し上げます。

《村山 翠》

訃報

● 荒川区登録無形文化財（提灯文字 平成17年度登録）保持者の石井一郎（号・大嶋屋）氏（南千住在住）は、去る平成26年9月11日に、65歳で逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。